

屋久島の民俗植物学

相場慎一郎（鹿児島大・理）・湯本貴和（地球研）

屋久島における植物利用（きのこを含む）について分析した。使用したデータは、湯本らがおこなった聞きとり調査（1986-1988）に基づく。そのほかに「屋久町郷土誌」・「屋久町の民俗」なども参考にした。

屋久島での伝統的な植物利用の多く（衣・住・遊び・薬・道具など）は、昭和30年ごろまでに廃れた。利用された植物の大半は、集落周辺や標高の低い二次林（いわゆる「前岳」）に生育しており、標高の高い原生林（「奥岳」）に生育する種はごくわずかであった。特に山地の野生植物やきのこが食物としてほとんど利用されていないことが目をひく。象徴的な例が、標準和名がヒサカキ・ハマヒサカキとなっている近縁な2種の樹木である。屋久島ではそれぞれヤマケサ・ケサンキと呼ばれ、標準和名とは逆に山地に生える種が集落周辺に生える種から派生した名前を持つ。

昭和30年ごろ以降に利用種数が増えたのは、食用・観賞用の栽培植物と観賞・換金用の野生植物である。高標高に自生するスギの巨木（いわゆる「屋久杉」）の利用は、屋久島出身で西日本を広く旅した儒学者、泊如竹の勧めにより、江戸時代から盛んになったとされる。この伝説に象徴されるように、高標高の利用植物や昭和30年ごろ以降に利用が始まった植物は、島外の人や島外の目を持つ島人によって「発見」されたと言える。